

〈部長〉青山 輝彦・加賀 正隆

河田 公悦

〈監督〉太田 久

◎庄内 豊(2年生)

〈部員〉3年生

昭和47年3月卒業

第42期

昭和45年秋季～46年夏季



チーム紹介

連携プレーを仕上げ

投攻守三拍子がそろっている。ファイトと根性もあり、県代表候補の一つ。甲子園への期待も大きい。

カーブが武器のエース伊藤は長身から投げおろす速球にも威力があり、鳳鳴の阿部政と並ぶ指折りの好投手。下手投げのリリーフ畠山も絶好調。シュートが得意で落ちる球も研究中だ。

捕手近藤はリードがうまく肩は抜群。県内随一との定評がある。外野の原田、畠山雅は100m11秒台の足。肩も強い。打線は本塁打を4本打っている伊藤、場外ホームを打ったことのある近藤のほか庄内、中田と上位は大物打ちがズラリ。短打に徹している下位も振りは鋭く、当りを取戻してきた。毎回得点がチームの目標。

「力はついた。連携プレーを中心に練習しているが、これが仕上がればあとは頭を使った悔いのない試合をするだけ」と太田監督はいっている。

◎昭和45年
秋季県北

能代7-4小坂

能代4-5大館南

◎昭和46年

春季県北

能代11-7米内沢

能代8-0大館商

能代13-2花輪

決勝 能代0-1大館鳳鳴

・全県選抜

能代4-3秋田工(延長15回)

能代2-4秋田市立

・能代選抜

能代7-0角館

能代6-1金足農

能代2-6秋田市立

・全県大会

能代7-0角館

能代6-4羽後

能代2-3秋田商

能代	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
秋田商	2	0	0	0	0	0	0	0	1	3

(能代) 原田-近藤

(金足農) 池田-長岩

〈部長〉加賀 正隆・続 隆

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

◎庄内 豊 東海林博之

伊藤 俊明 柴田 信紀

金谷(中田)久弥 原田 悟悦

近藤 雅裕 畠山 雅次

そして古谷が依然として走るなどして、またたく間に走ってきた。

私の野球歴史

主将 庄 内 豊

我々世代は昭和45年と46年に甲子園予選を経験した。なぜ2年連続甲子園予選を経験したかというと、2年生時先輩が誰もいなかったからである。おかげで私は2年連続主将を務めた。もちろん、その当時の能代高校硬式野球部では、2年連続主将というのは誰もおらず、卒業して30数年経った今でもその記録が破られていないようである意味では、自分自身大変貴重な体験を経験したことになる。今思えば決して楽しいものではなかったが今の自分の人生にとっては、かなり役立っているかもしれないと最近良く考える。

当時の練習は正直きつかった。私は高校入学時、まさか硬式野球部に入ろう、いや入れるなどとは夢にも考えなかった。甲子園に出場した能代高校硬式野球部、有名で、厳しい部に身長155cmの自分が入れるとは決して思いもしなかった。両親も、中学校での成績がマアマア良かったので、進学校の高校で勉強を期待していたはずであった。入試の時は、自己採点で平均90点以上は取っていたからである。しかし、今振り返って考へても、何で入部したのかもう定かではないが、すっと入ってしまったという感じ。両親にも相談せず、自分で入部を決断した。体格的には小さすぎたと思うけれども、好きだったのだと思う、野球が。

グランドに出れば、同期では各中学校の有名選手がずらり、私は全く無名、ボール拾いで終わるかも知れないと、本気で考へた時期もあった。

しかし、先輩も良くしてくれて、何とか野球部になじむようになった。そして食欲旺盛でもあった。朝、10時、昼、3時、練習終了後はツケで軽食、それに夕食と1日6回食べたこともあった。日中食べると眠くなり、授業中は居眠り、成績は下がる一方となつた。

当時の練習は正直きつかった。水飲みが禁止のためよく隠れて水を飲んだものだ。するとすぐ汗をかく、またノドが渴くその繰り返し。当時練習は樽子山グランドであった。一塁側が民家であつ

た。そちらにファールが入ると一目散にボールを探しに行き、何度水を恵んでもらったことか。うまかった。あの水の美味しさは今の子供たちに話しても判るまい。そのくらいその時点では大変貴重な水だった。

我々は今の中日の監督、落合と同期である。山田先輩の後に監督になるとは何とも言えない気持ちではあるが。営業で落合の事は結構使わせてもらった。彼が秋田工業の時、3年の八橋球場での全県選抜大会で延長15回やって勝ったと客に自慢していた。

我々の同期は結構今でも仲が良く、帰郷などした際にはよく集まって飲み、昔の話に花を咲かせる。本当に楽しいひと時である。何も気を使わず、昔の出来事をつまみに大いに盛り上がることが出来る。私は家業を継ぎ、金谷（旧姓：中田）はタイヤ会社社長、伊藤は北都銀行、これが県内組。良く集まる県外組が、原田（同級生の啓子さんと結婚）は労災病院事務局長、近藤はビルメンテ会社社長。殆ど参加しないのが東海林（ジャスコ勤務）、畠山、柴田は音信不通となっている。そして、紅一点が居る。塚本恵子さん、地元塚本油店勤務と日沼（旧姓：石井）香乃子さん、静岡在住。恐らく我々だけではなかろうか。新聞記事にも取り上げられたが、当時のPTA会長や副会長が野球部を応援するためにそれぞれの娘さんを手伝い（マネージャー的仕事）として動員してくれたのであった。やはり女性が居ると飲み会も更に盛り上がるものである。本当に感謝である。甲子園に連れて行きたかったと思ってもう遅いのであるが。本当に盛り上がる楽しい会だ。

香乃子さんのお父さんは石井周平さん。この方を我々当時の野球部員は決して忘れない。1つには、周平さんは昔応援団だった。練習が終わり、樽子山の夕暮れ時に周平さんが歌ってくれた“戦わん哉”には感動した。知らず知らず涙が出てきた。夕闇の樽子山に響いた歌声は生涯忘ることはない。2つには、甲子園予選で敗れた後も本当に我々を面倒見てくれた。もう時効だからよいと思うので書くが、周平さんの自宅で我々はビール

をたらふくごちそうになった。今ならいろいろと問題が出るところだろうが、そういう点で周平さんは豪快に我々を扱ってくれた。その外にもまだまだあるがこの辺でやめておこう。

3つに、石井周平さんは当時、鷹巣にあった石井樽丸工業(株)の社長さんでもあり、当社庄内鉄工株式会社の大得意先でもあった。私が今の会社に入社してしばらくして、周平さんは亡くなった。恩返しの一つも出来ず、本当に残念に思う。長生きをしてほしかった。

少し、我々の戦力と戦績について述べよう。

エースは伊藤、彼はかなり期待されて硬式野球部に入部、恵まれた体から繰り出す速球はとても速かった。しかし精神的な部分と故障がちで、2年の甲子園予選一回戦で金足農業に3対0で敗れた後は主に左翼手。しかし我がチーム不動の4番であった。飲めば話題になるのが、3年時、甲子園予選が終わって、市内高校選抜とノンプロの秋田相互銀行との対戦。彼は投手として投げたのだが、彼のその時の投球が、高校生活では最も速かったとみんな認める。甲子園予選でなーー、と皆で残念がる。その後伊藤は秋田相互銀行野球部に入部、代打で甲子園でホームランを打った。我々は溜飲が下がった。

伊藤に代わってエースとなったのは原田悟悦。ガッシリとした体格で足が速く、投手で一番というなかなかない打順。打率が良く出塁率は群を抜いていた。2番が私なのでサインは決まって、引きバントの様子見から送りバント。おそらく7割方バントであった。そのくらい塁に出た。そして後の近藤、伊藤、中田で1点と言うのが、我がチームの得点パターンだった。おかげでバントには送りであれ、スクイズであれ殆ど失敗しなかつたことが、唯一私が自慢できる事。原田は投手でも凄かった。ドロップのように縦に大きく割れ落ちるカーブ、これは殆ど打たれたことはないと思う。それに速球を交えて、本当に安定感のある投手であった。3年の甲子園予選は原田一人で投げ抜いた。宿舎に帰ると菅原医師から痛み止めの注射をうつてもらって本当に良く投げた。最後に負けた

秋田商業戦。2対2で迎えた最終回一死一塁、三塁、一打サヨナラのピンチ。当然満塁策と思いつかず、マウンドに駆け寄った。原田は泣いていた。大変さがすぐ判った。投げるのが精一杯だったのである。何も言わずにショートへ戻った。次の1球、ボールはど真ん中、スクイズされ終わった。頭が真っ白になった、スローモーションのように動いている感じだった。悔いの残る試合ではあった。しかし、みんな精一杯やって負けたと思った。これが我々の限度だと思った。応援してくれた方たちにはすまないが。

捕手の近藤。彼は大沢先輩の再来とも言われた凄いやつ。スラッガーで本塁打も何本か打っている。しかし彼の最も凄いところは、送球である。盗塁されたことは私には記憶がない。地を這うボールがベースの上に構えているグローブ目掛けてくるのだ。“アウト！”何とも気持ちのいいコールを何度も聞いたことか。ランナーが一塁に出ると早く走れと願ってた。そのくらいアウトの確率が高かった。

中田。彼は本来は捕手であった。しかし上述のように近藤がいたため、投手陣がまだ固定化していない時よく投手もやった。捕手スタイルで若干変則的ではあったが、上背があり、ボールも結構速かった。最終ポジションは一塁手となった。県北大会決勝大館鳳鳴戦、私の低い送球を中田が捕球出来ず結果1対0で負け、翌日の新聞に高価なエラーと評されてしまった。酒席ではどちらのミスであったか議論するが、未だ結論が出ず、酒の肴となっている。

次に大学時代のことを書こう。高校を卒業でき、日本大学生産工学部に入学できたのは、担任であった金谷部長と太田監督のおかげであった。高校時代は殆ど勉強をしなかったため、大学ではしっかりと勉強しようと心に決めた。ましてや理系の大学である。1年の学科対抗野球大会の後、硬式野球部の方がわざわざ来て、勧誘を受けたが、その時はきっぱりと断った。しかし野球の虫はじつとしていなかった。2年になってから1年先輩と軟式野球同好会を立ち上げ、日本大学学部対抗のリ

一ヶ戦を行った。3年には部に昇格し、予算もつき地方遠征の合宿も行なった。4年の時新入生部員勧誘をしていたら、1人の男性が入りたいというので、住所氏名を記入してもらって驚いた。「秋田県」、ナニ!、「能代市」、ナンタカ!、「桧山」、ホント? というわけで、桧山納豆の息子さん(農業共済組合)の西村省一君だった。彼とは帰能後、朝野球、昼の野球と共に同じチームで長い間一緒にプレーした仲だった。

大学では年に1回学科対抗の野球大会がある。3年の時、我がチームは私が全試合完投し(バッティングピッチャー経験のおかげ)、結果、優勝し私がMVPとなり胴上げされ、そして落とされたのであった。優勝コンパの最中の出来事で、学部始まって以来始めて救急車がキャンパス内に入った。手が全く動かず酔っていたためかなり興奮していた。検査の結果全く異常なし。酔いがさめて考えてみたら、瞬間に受身を使い、手でコンクリートを叩いたため、手がしびれて動かなかつたと判明。大変恥ずかしい思いをした。しかし留年することなく、無事卒業することが出来た。卒論のテーマは“石材汚濁水の凝集効果について”。

今は既に50歳となり、体も以前のように動かせなくなり、大半の方と同様、口だけが順調である。甲子園に最後に出場してどれくらいなるだろうか。あの時は燃えた。始めて甲子園球場アルプス席で家族全員で応援した。もっとも一番下の娘はある騒々しい雰囲気の中で熟睡をしていたが。よく思う、何が能代市を一番活気づけるかを考えてみた。それは間違いなく甲子園出場決定の報である。以前より人気は落ちたとはいえ、やはり野球にかなうスポーツはないと考える。集まる寄付金の多さが歴然。しかし、最後に甲子園出場した後の成績はご承知のとおりである。全く残念であり、寂しい限り。このように長年、惜しい戦績も残せず、もちろん甲子園にも行けず、また少し良いかと思うとそれを持続できず、この繰り返しのように思う。

こうなるとやはり私は指導者の資質の問題では

ないかと考えざるを得ない。生徒を掌握しきれずうまくコントロール出来ないのだと思う。信賞必罰を完全に実行しているだろうか。負ければ監督の責任、勝てば選手の活躍によるということを実行し、表わしているだろうか。若者はほめかた一つ、怒り方一つでよい方向に化けたり、悪いほうの態度を取ったりすることを判っているだろうか。こんなに長く勝てないので、先輩に相談したり、指導を受けたりし、何か対策を実行しているだろうか。毎年毎年赤字の会社であれば、社長は即クビである。毎年こんなことをしていたら、第一、選手がかわいそうだ。監督は何年もやれるであろうが、選手のチャンスはたった1年だけである。残念ながら勝負事は結果が全てである。全く勝てないのであれば、指導者は進んで自ら判断を下さなければいけないと思う。結論は言うに及ばずである。

母校硬式野球部が、早くしばらくぶりで甲子園出場を成し遂げ活躍し、我々も一緒になって盛り上がりたい。その日が早く来ることを念願しております。

夢と汗と涙の間

金谷(中田)久弥



私の高校野球時代、想えば、不思議な時空のような気がする。

炎天下の「秋大球場」、同点で迎えた9回表、先頭打者として打席に立つ私がいた。何故か、涙が出て止まらなかった。その涙目の中から、相手投手の白い球が、ぼんやりと見える。あっと云う間に、ツーストライクと追い込まれる。そして4球目の真ん中高目のストレート、無心に振ったバットは、その球をセンター前へと運んでくれた。一塁ベース上で、唯々神に感謝した。それが、私の高校野球の最後の打席となった。敗戦後の球場の外で、車のカーステレオから何処からともなく、当時流行の「吉田拓郎」の歌が流れていた。“今

日まで、そして明日から……”。

あの時から30数年、太田監督、コーチ、先輩、後輩、そして同期の仲間、様々な人達と、めぐり合い過ごした3年間、そんなに楽しいことばかりではなく、どちらかと云えば苦しいことが多かつ

たような気がする。それでいて、私の生きてきた過程で、最も掛け替えのない貴重な3年間であり、誇りに思う。

あの時、青春の夢と汗と涙の間に、確かに私はいた。

昭和48年3月卒業

第43期

昭和46年秋季～47年夏季

チーム紹介

戦力

エースは右腕・畠山。下手から外角をよぎる速球は重く、威力十分。ただ、神経質で実戦に弱いきらいがあり、連日座禅を組んで精神統一を図っている。控えは左腕・武田。

シュアで切れ目のない好打線。1番神馬、3番武田、5番大塚が4割台をマーク、2番池端、6番成田も3割台。4番小野が不調から脱すれば、相手投手の脅威になりそう。

守りは、小野、袴田の三遊間に難があったが、強化合宿で一日300本のノックを行い鍛えがはいった。捕手大塚は強肩。神馬、成田、池端の外野陣は俊足ぞろいだ。細かい連携プレーにどう対処するか。

◎昭和46年
・秋季県北 能代9-8十和田
能代2-1大館鳳鳴
能代8-3大館工
決勝 能代0-1大館商
・全県選抜 能代0-4秋田市立
◎昭和47年



・春季県北 能代6-2花輪
能代3-0十和田
能代3-2大館鳳鳴
(3年ぶり6回目の優勝)
・第20回全県選抜(12校出場)
能代3-4大曲
・能代選抜 能代5-2大曲工
能代5-10秋田市立
・全県大会(42校出場)
能代5-4角館
能代7-0能代工
能代0-13金足農

金足農	3	1	0	9	0				13
能代	0	0	0	0	0				0

(金足農) 菊地一佐藤

(能代) 畠山・池端・武田・大塚

〈部長〉続 隆・金谷 晴隆

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

○小野 正博 畠山 和長

大塚 和博 金谷 弘征

神馬 悟 袴田 俊光

簾内 正充

エピソード

袴田俊光

[その1]

合宿中のある夜、合宿所の生徒の部屋でルールについての勉強会が開かれていた。コーチの新林さんが「ファールラインがファールグランド側に半円状に大きくなんで引かれていた。そこに落ちた打球はフェアかファールか?」という問題を出した。その後も同じように現実にはありそうもない問題が次々に出され、そのどれも答えられないでいる私たちを見て、新林さんは得意気にやにやしていた。何問目かの質問の後、私は耐えられなくなって叫んでしまった。「そんだごど聞いでも、分がらねじゃ!」それは、いつの間にか寝入ってしまっていた私の寝言であった。

[その2]

合宿中に雨が降ると普段以上にうれしかった。ある夜、東海林さんが布団の中でまどろんでいると、隣の布団の中の私が突然「雨降ってきた! 雨降ってきた!」と叫んだ。それを聞いた東海林さんは、慌てて布団から這い出して窓の外を見た。しかし雨は降っていなかった。これも私の寝言であった。

[その3]

同期に浜口中出身の三浦というピッチャーがいた。全県大会に出ただけあって、すごくブレーキのきいたカーブを投げるピッチャーであった。期待の新人だったので、入部間もなくの頃からバッティングピッチャーをさせてもらっていたが、彼は、時々「間違って」カーブを投げてしまうことがあった。この変化球に先輩たちが空振りすると、「すいません」と言いながら、変だな、どうして変化したんだろうというふうに首をひねっていた。実は、彼はわざと得意のカーブを投げて先輩たちに空振りをさせ、密かに喜んでいたのである。将来を嘱望された新人投手も夏休み前に退部してしまい、そのカーブは文字通り幻になってしまった。

[その4]

1年目のとき、秋の県北新人戦で出来たばかりの大館高校に負け、次の日から監督が練習に来なくなった。どうなるんだろうと不安だったが、庄内主将のもと自分たちだけで練習を続けた。冬になったある日、いつものようにランニングに出かけた。いつもは能代公園まで行って階段をダッシュするのだが、この日の庄内さんは能代公園には向かわず、米代川の橋を渡り、向能代を越え、私がこれまで来たことも見たこともないところをどんどん走っていった。一体どこまで行くのだろうと思いながらついていった。途中で東海林さんか中田さんが「こんだけ走って学校さ戻ってヤジ来ればどっさーじや?」と庄内さんに訴えた。その場面を想像して私は体が震えた。やがて私たちはどこかの神社の境内に入っていき、そこで小休止してから、学校に戻った。こんなに長い距離を走ったのは十里強歩以来であった。練習が終わり体育館で道具を片づけているところに、突然監督が現れた。一瞬、時間が凍りついた。東海林さんか中田さんか原田さんが庄内さんに小さな声で言った。「んだから言ったべしゃ!」その後、私たちは体育館をヘドが出るほど走らされた。数ヶ月ぶりの太田監督の指導の再開であった。

[その5]

大会があって秋田市に出かけたとき、こんなことがあった。秋田駅で汽車を降り、改札口を出たら、何十人というやくざの人がズラっと整列していた。緊張して監督の後について行くと、やくざの人たちが監督に向かって一斉に礼をした。それに対して監督も礼を返した。監督はやくざと友達なのだろうかと思った。

事の真相はこうであった。その日は秋田市のなんとか組のやくざの親分の葬式の日で、その組関係の人たちが、葬儀に参列するために各地からやってくる人たちを秋田駅で出迎えていたのであった。われわれの監督は、やくざにやくざと間違われたのであった。

[その6] [その7]

高校3年になって、部長が続先生から金谷先生に変わった。続先生はとてもやさしい人で、私たちにとっては厳しい部活動の中のオアシスのような存在であったが、新しい部長は監督より怖い人であった。この世に監督より怖い人間がいるということは驚きであった。

[おまけ]

教師になって能代北高に勤務していたとき、高校時代の監督が事務長として転勤して来られた。

挨拶に行かねばと思い事務室前まで行ったが、緊張と恐怖であぶら汗が流れてきて、足が動かなくなった。

当時の北高には部長の金谷先生もおられた。そして生徒の保護者としてコーチの伊藤さんや田辺さんもおられた。つまり私は自分の高校時代の野球部のスタッフのほとんどに囲まれて仕事をしていたということで、「松陵会」の数多くの会員の中でもこれほどの幸運に恵まれた人間は私ひとりではないでしょうか。



チーム紹介

戦 力

速球の原田、鈴木、斎藤と左腕のショートリリーフ武田隆と一応コマは揃った。原田がエース格だが、やや度胸不足。期待は新人の鈴木でナックルも効果的。決勝を含めて6試合もあるので、早めに投手を切り替えて行く作戦だ。

6番までが得点源。成田、武田隆、青山が4割以上打っており、チームの平均打率も2割7分5厘と高く長打力もある。しかし、例年に比べここ一発の勝負強さにやや欠けている感じで、変化球克服も一つの課題。

守りは、全員足、肩ともまずまずで、篠田主将を中心によくまとまっている。内野に2年生が多いが、青山がよくリードし、また伝統の猛練習でAクラスチームの力を十分つけた。外野は、全員3年生で心配はない。

◎昭和47年	春季県北	能代11-0 大館南
・秋季県北	能代11-0 花輪	能代9-0 花輪
・全県大会	能代7-3 能代工	能代7-3 能代工
決 勝	能代1-2 大館鳳鳴	能代1-2 大館鳳鳴
・全県選抜	能代5-4 秋田市立	能代5-4 秋田市立
	能代1-4 秋田商	能代1-4 秋田商
◎昭和48年		
・春季県北	能代7-4 十和田	能代7-4 十和田
	能代7-3 大館商	能代7-3 大館商
	能代4-6 能代工	能代4-6 能代工
・全県選抜	能代2-4 本荘	能代2-4 本荘
・能代選抜	能代9-1 秋田市立	能代9-1 秋田市立
	能代0-3 秋田	能代0-3 秋田
・全県大会(43校出場)		

能代3-2西目農業高能代7-0大曲東能代12-1湯沢能代1-6大館商

大館商	0	0	0	4	0	0	0	0	2	6
能代	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

(大館商) 神成一長谷川

(能代) 斎藤一篠田

〈部長〉金谷 晴隆

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

○篠田 明 小林 憲夫

渡辺 邦慶 武田 隆

青山 吉和 武田 芳美

池端 信幸 成田 兼春

DNAは？

主将 篠 田 明

能代高校硬式野球部の歴史は、太田先生の歴史であると言える。よく太田野球とは？と聞かれることがある。私は、その都度、野球に対する、情熱の強さと愛情の深さであると答えている。もちろん、それだけではないのだが。

悲しいことに今、太田野球のDNAを受け継ぐ高校野球の指導者（能代高校硬式野球部OB）は県内においては、いない。

ただ、神奈川県に2人いる。鎌倉学園高校武田隆監督と藤沢翔陵高校の大山望監督である。武田監督は27年間、大山監督は25年間、指導者として激戦区の神奈川において、よく健闘しているが、今一步、栄光はつかめていない。彼らの教え子が、指導者となったとき、太田野球のDNAは、必ず、受け継がれるものと思う。

野球は、技術面、戦術面において日々、変化している。ただ簡単に教えることができないのが、精神面においてである。ピンチにおいても、チャンスでも、心の持ち方で全然違ってくる。太田先生は、いまだに、野球のことを研究なさっている。

頭が下がる思いである。今の、高校野球の指導者は、お願いしても、太田先生を訪ね、野球の話を聞くべきである。

かつて、太田先生が、学校の枠を越えて、赤根谷先生を訪ねられたように。

私の心の甲子園

武 田 隆

樽子山の古い木造校舎。裏門を通ると大きなバックネットと野球の練習場。高校時代を思い起こすと目に浮かぶ、懐かしい風景です。必死で白球を追い、汗にまみれた3年間は私にとって大切な財産であり、能代高校はいつまでも心のふるさとです。

私が在籍した3年間の夏の大会は、全てベスト8で敗退しました。10年先輩が甲子園初出場を果たし、4年後輩が2度目の出場をした間の谷間の時代でした。県北大会も秋春とも準優勝。県大会レベルでは2年秋のベスト4が最高成績でした。篠田主将に一度も優勝旗を持たせられなかつたのは今でも残念に思っています。結果は出せませんでしたが、本気で甲子園を目指した3年間は、私の心の中の甲子園です。

大館での秋の県北大会。太田監督が竹刀を持ってベンチ入りしました。「鬼監督…」と新聞にも報道されましたが、今では考えられないことです。良き時代でした。春の県北大会の決勝戦では、監督が試合中に鼻血を出し、ベンチに横にならざるを得ないアクシデントが発生しました。同期の渡辺が監督に戦況を伝え、指示を受けてサインを出した試合も忘れられません。どんな状況でも試合をあきらめない監督の執念を感じました。2年の夏の大会準々決勝。八橋球場で相手は金足農業。試合前に金農がホームからレフトに向かって何度も何度もヘッドスライディングを始めました。整列した時には全員泥だらけです。この相手は普通ではないと我々が思ったところで勝負があったのでしょうか。結果は無惨でした。3年の春の大会では私自身忘れない屈辱の思い出がありま

す。本荘高校が相手でした。森川という左腕投手だったと思います。好機にことごとく三振、私が一本打っていれば勝てた試合でした。高校生活最後のヒットは県立球場での大館商業戦、ランナーを二塁においてライトに飛びました。今でも目に浮かびます。

学校での練習も忘れられません。2時40分に授業が終わると3時から練習です。部長の金谷先生がシーズン中は部員の掃除当番を免除してもらっていました。毎日暗くなるまでフリーバッティング、試合形式のバッティングが続きます。うす暗くなつてから守備練習、その後走塁練習などで練習終了。監督さんが「ご苦労さん」というのは毎日8時半。辛い日々でした。合宿も心に残っています。春から夏の大会まで3回行われました。毎日早朝、放課後、夜の体育館練習の3部練習で大変でしたが合宿終了時の達成感も得がたい体験でした。合宿の食事の豪華さも忘れられません。食の細い同期の武田芳美が「練習より出されたメ

ニューを全部食べるのが辛い」と言った言葉、今でも覚えています。早朝から太田監督、金谷部長が揚げ物をしていた姿が思い起こされます。勝たせるために栄養のあるものをたくさん食べさせようという指導者の思い、後になってよく分かりました。

「指導者は泣き言を言うな」。現在神奈川県で高校野球の指導をしております私が大学4年の時に、太田監督に進路の報告をした時に頂いた言葉です。以来この言葉を肝に銘じてやって参りました。高校野球には時代の変化とともに変わらなければならないものと、変わってはいけないものがあると思います。その変ってはいけないものを能代高校で教わりました。これからも高校生に伝えています。

良き師と仲間に出会えた意義のある高校生活でした。これからも母校野球部が卒業生にとって、いつまでも心の拠り所で在り続ける存在であってほしいと願っています。

昭和50年3月卒業

第45期

昭和48年秋季～49年夏季

チーム紹介

戦力

投手は、2年生鈴木の成長で、実績のある斎藤がリリーフ役に回った。鈴木は県内屈指の速球派投手で完投能力もついてきたが、制球力がいま一つ。斎藤との継投の時期が問題だ。控えには、ショートが武器の原田がいる。

守りは、原田を一塁から古巣の中堅に戻し、不安はない。一塁には右翼から上林が、右翼には中堅の斎藤、鈴木が回った。大会直前での大幅な入れ替えだったが以前より引き締まった。捕手高橋

も精彩が出てきた。

下位まで打線の切れ目がなく、しづとい攻撃を見せる。特に1番鵜木、3番斎藤がシャープな打撃を見せる。4番原田は勝負強さをつけてきた。2番小松、6番大山も出塁率が高く、よく先発役を果たしている。

◎昭和48年

・秋季県北

能代3-4大館鳳鳴（再試合）

◎昭和49年

・春季県北

能代1-0大館鳳鳴

能代4-0花輪

能代2-1能代工

決 勝 能代4-11大館商

・全県選抜

能代8-1秋田工

能代2-3秋田市立

・能代選抜

能代5-6大曲工

・全県大会

能代8-0横手工

能代2-3角館

角 館	0	0	2	1	0	0	0	0	0	3
能 代	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2

(能代) 鈴木・原田・鈴木一高橋

〈部長〉金谷 晴隆

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

○齋藤 道明 大塚 正文

小玉(鵜木)隆幸 小松 公明

近藤 隆一 高橋 秀夫

上林 孝弘 原田 康男

「一瞬」であった樽子山の思い出

主将 齋 藤 道 明

能代高校硬式野球部在籍当時の太田監督、金谷部長、また同期の仲間である大塚、上林、小玉、小松、近藤、高橋、原田、たいへんご無沙汰しております。元気でご活躍のことと思います。

この原稿の依頼を受け、筆を進める中、能代高校を卒業してから30年の歳月が経った早さに驚くとともに、向上心に燃えて学んだ樽子山の校舎や、練習に明け暮れたグラウンドの姿をありありと思い浮かべています。

樽子山の今はなき校舎の最後の3年生であり、高塙の現校舎の最初の卒業生でもあったと記憶しています。

忘がたい樽子山の校舎については、中和通りから少し見上げる正門、床屋さんと駄菓子屋さんがいたグラウンド側の門、全てが緑に囲まれた木

造の校舎や体育館、バックネット裏の合宿所・食堂、三塁側のブルペン、テニスコート(?)があったレフト側、かなり奥が深かったセンター側、沈む夕日が眩しかった狭いライト側、工場か作業所のあった一塁側の風景などが、手に取るように鮮やかに蘇ってきます。

高校野球に取り組んだ3年間の経験は、我々にとって、各々の喜怒哀楽が様々に交錯した思い出となって残っているのではないかと思います。

今ここで、30年経過して改めて振り返ってみると、挨拶の励行、朝・昼のグラウンド整備、球拾い、遠征時の用具持ち、練習の準備と後片付け、練習試合、公式試合、合宿、朝練習や日没後までの練習、真夏や真冬の練習、激励会、100本ノック、雨水の溜まったグラウンドの穴掘りなど様々な思い出が脳裏に蘇ってきますが、私個人にとってはまさに「一瞬」であり、どちらかと言えば、己の努力が足りず完全燃焼できなかったという思いが強い気がします。

しかし、「甲子園出場」という共通の目標を持って取り組んだ、充実し凝縮された3年間の日々は、経験したいと思っても二度と経験できない、一度だけの褪せることのない特別なものであり、我々の心にかけがえのない思い出と友を残してくれました。青春時代とは感覚や価値観が変わったところもありますが、貴重な経験ができたことは、たくさんの心の糧、大きな財産となっています。

現在日々を過ごしている現実もやはり厳しく、努力しても結果が伴わないことも多くあるのですが、目標を持った一人ひとりの個性を認めあっての「まとまり」の良さを、今後も大事にしていきたいと思っています。

また、人生は「多くの友に支えられている」ことを再認識するとともに、友とのネットワークを絶やすことなく続けていかなければならぬと痛感しています。

3年間高校野球を続けられ、無事卒業できたのは、当時の能代高校の校長先生、太田監督、金谷部長をはじめとする教職員の皆様、親、家族、親戚、諸先輩・後輩の皆様、その他多くの学校、高

校野球関係者の皆様の多大なるご理解とご協力のお陰だと心より感謝しております。本当にありがとうございました。

今後も、樽子山と高塙の思い出を、充実した人生のひとこまとして忘れることなく、瞼の奥深くにしっかりと焼き付けておきたいと思います。

最後になりますが、歴史と伝統ある能代高校と能代高校硬式野球部の更なる発展を祈念しております。

樽子山の土

小玉(鶴木) 隆幸

昭和49年11月、能代高校は長年の学び舎を樽子山から高塙の地に移しました。その年3年生だった私は、能代市住吉町の自宅から、雪の降るまでの期間は自転車で、雪が降り始めてからは汽車通学をしながら卒業を迎えたように記憶しています。卒業後能代を離れ、今に至るまで樽子山の地を再び訪れる機会の無い私にとって、樽子山こそ母校の思い出の詰まる地であり、樽子山のグランドこそ汗と涙とそして数々の思い出が染み込む母なる大地といつてもよいでしょう。

1年次の梅雨時だったと記憶していますが、豪雨により米代川が中川原で氾濫したことがありました。赤土の水はけの悪いグランドにはあちこちで水溜りができ、我々1年生は練習前にスコップで穴を掘り、そこに水を流し込んで整備したこと覚えています。

2年生になりサードのポジションを任せられるようになってからは、守備の苦手な私は来る日も来る日もノックの洗礼を受けました。

グラブは下から、打球へは守備位置から最短距離で体の正面でぶつかっていけ等、様々なアドバイスをもらいながらも、ジャッカルして足元の小石をつまんでグランドの外に捨てる毎日でした。そんな中での予選前の強化合宿での事でした。合宿では予選の第1試合の試合開始時間(8時)に合わせて毎朝4時半の起床でしたが、新林コーチの「起きろっ」という声で飛び起き、すぐさま練習前のグランド整備をしていると、同期の仲間が一緒になってサードの守備位置にレーキをかけてくれた事が今でも忘れられません。

3年生になり予選に出発する前日の練習での出来事でした。春の全県選抜で、優勝した秋田市立高(夏の大会優勝校)に惨敗し夏は第3シードで臨むことになったわけですが、是が非でも甲子園へと気持ちが昂ぶっていた私は、冷静さを失い何でもないゴロに対しガムシャラに突っ込み、イレギュラバウンドを左目の下に当ててしまいました。そのまま翌日からの試合には出ましたが、我を忘れるほど高揚した私の気持ちを、グランドが諫めてくれたのだと思っています。

その他挙げればキリのない程の思い出が走馬灯のごとく蘇りますが、私にとってグランドにまつわるエピソードが、2年半の野球部生活の中でもとりわけ印象深く残っています。樽子山のグランドよ、ほんとうにありがとうございます。

最後に私を支えてくださった太田監督、金谷部長、コーチの新林さん、田辺さん、1年次の主将だった小野先輩、2年次主将の篠田先輩を中心とする諸先輩、そして同期の斎藤君、高橋君、上林君、大塙君、小松君、原田君、近藤君に改めて感謝を申し上げます。

